

会員だより

筑波大学献体事務室の業務紹介 —— 白菊会とともに、解剖学教育を支える協働の現場 ——

筑波大学医学群医学類の解剖学教育、とりわけ系統解剖学実習は、ご献体くださる篤志家の皆さまのご意思と、それを教育へと確実につなぐ献体事務室の実務によって支えられています。大学で行われる解剖にはいくつかの種類がありますが、ご献体による解剖は、医学・歯学の学生が正常な人体構造を理解するための教育として行われる「正常解剖（系統解剖）」であり、医学教育の基礎をなすものです。

献体事務室が担う業務は、献体団体（白菊会）の事務、解剖実習の補助や標本作製、必要な手続きのもとでのご献体受入れと保全、ご献体の管理、そして火葬・返骨の手続きまで、多岐にわたります。実務の根底にあるのは、故人の尊厳を守り、ご遺族の思いに寄り添いながら、教育・研究の場へと適切につなぐという姿勢です。白菊会は、献体を支える篤志家団体として組織され、その事務局は医学群棟の献体事務室に置かれているとされています。また、白菊会の目的は、献体運動の推進を図り、医学の発展と人類の福祉に貢献するために会員のご遺体を筑波大学医学群に寄贈することです。つまり献体事務室は、大学の教育活動の一部としてだけではなく、大学と地域社会をつなぐ信頼の窓口としても機能していると言えます。

教育現場との接点として重要なのは、系統解剖学実習が「知識の習得」だけでなく、「生命への敬意」や「専門職としての倫理」を涵養する機会として設計されている点です。実習初回到教員からご献体に至る経緯や、生命への尊厳・倫理基準が説明され、黙祷に始まり黙祷で終わる厳粛な雰囲気の中で、教員・学生・技術職員が真剣に向き合って実習を進めることが述べられます。筆者自身、解剖学講座の教員として日々感じているのは、この「教育としての場」を安定して維持するために、献体事務室の方々が、目立たないところで多くの調整と確認を重ねてくださっているという事実です。

安全で学びの多い実習環境を整えることも、献体事務室と教員の協働領域です。実習室の環境改善として、ホルムアルデヒド管理を背景に局所排気装置付き解剖台の導入が検討・実施されたことや、点検項目（損傷確認、風量測定、屋外ダクトの目視点検、接続部の確認）が示されています。こうした継続的な維持管理があるからこそ、学生と教職員は教育内容そのものに集中できる環境を得られています。

現在、献体事務室では瀬谷祐一氏、矢部一徳氏、水谷 慶氏が中心となり、日々の実務を担ってられます。私たち教員側は、実習の設計・運営、学生への教育的メッセージの発信、評価の実施といった役割を担いながら、献体事務室と情報共有し、相互に補完し合うことで、筑波大学の解剖学教育を成立させています。献体制度は、献体者のご遺族のご厚志、そしてそれに応える大学の責任ある運用によって成り立ちます。返骨や慰霊に関する運用、学内慰霊塔・納骨堂の存在、慰霊式当日の参拝の機会などは、その責任を具体的に形にしている取り組みです。教職員にとっては、献体事務室との協働を大学全体の教育基盤として再確認し、持続可能な体制をともに考えていくことが重要だと考えています。

医学医療系 生命医科学域
解剖学・神経科学研究室 佐々木哲也